古東哲明：学術システム研究センター主任研究員／広島大学（哲学）

2014. 7. 17 於:学術の基本問題に関する特別委員会（第７回）

*:. . 。 . o○° ° *☆

人文学の森

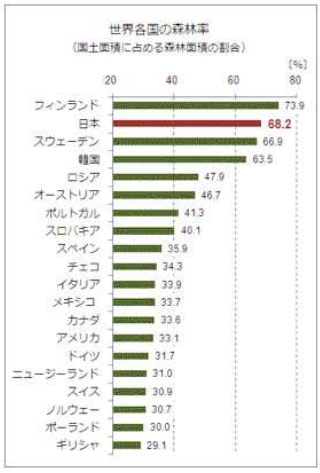
*:. . 。 . o○° ° *☆

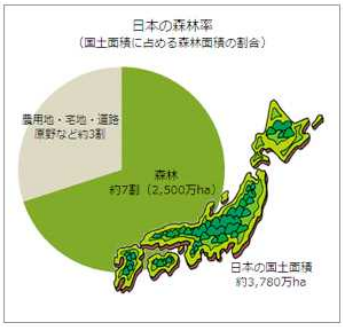
【１】学術は森
【２】逆生産性に抗して
【３】慈雨の思想
【４】人文の森マップ

東広島市香堂原森林の朝

****
【１】学術は森
****

(1) 日本の森林率





（出典）森林・林業学習館ホームページ

図　日本と世界各国の森林率

６８．２％

世界第二位
世界平均 30%

（国連食料農業機関（FAO）2010 発表）

(2) ヴァナキュラーな恵みの宝庫

森林の持つ機能	評価額
表面浸食防止	282,565 億円
水質浄化	146,361 億円
水質源貯留	87,407 億円
表層崩壊防止	84,421 億円
洪水緩和	64,686 億円
保健・レクリエーション	22,546 億円
二酸化炭素吸収	12,391 億円
化石燃料代替エネルギー	2,261 億円
合計	702,638 億円

木材、山菜、木の実、茸、繊維・染色材のみならず、野性生物生息場、大水源、防災システム、二酸化炭素吸収、酸素供給、絶景・森林浴・精神清浄化レクレーション提供など、「**ヴァナキュラーな価値**（一般市場で売買できない恵み）」（I・イリイチ）に満ち溢れている。
ヴァナキュラー部分を強いて金銭換算すると……

七〇兆圓也　　まさに「国力の源」

（農林水産省「地球環境・人間生活にかかわる農業および森林の多面的機能の評価について」）

⑶ 非知の世界／複雑系的多様性

森林の実態、不明・非知のテリトリー。 zB. 命名率５％（中村桂子氏）

人知・人意では不分明な分からなさに充ち溢れている世界。

不分明なものを知りえないまま認識する態度=「**非知**(non-savoir)」（G・Bataille）

∴現代思想⇒非言語、ノワーズ、無根拠、他なる世界(Au delà)、死などの異他性・他性探求

zB. 不分明なる宇宙：ダークマター／ダークエネルギー……96%

⑷ 人為を超えた位相〔無為自然〕

人為(人知・人意)で完全にコントロールできるものではない〔⇒「無為自然」老荘思想〕

自然活性力８０％ ⇔ 自然治癒力８０％（治癒力を誘引する医術パート２０％）

⑸ 時熟性

促成栽培のトマト畑はできても、促成栽培の森はない。

ヴァナキュラーな価値もつものの育成には、時間かかる。学術もまた。

⑹ 学術の森の中心力

研究者の内的必然性=個人の自由・創意・熱情・夢想（F・C・P・D）

「個々の研究者の本当の心の奥底からのエネルギー」

（安西祐一郎：「学術の基本問題に関する特別委員会（第７期）第１回議事録」、以下「議事録」と略記）

☆人文学：「知的好奇心駆動型」、「痛苦解決型」営為=「自己目的的(Autotelic)」活動

⇒内発的報酬由来の愉悦≠外発的報酬由来の愉悦（チクセントミハイ『フロー体験』第一章）

⑺脱人為圏

非知の位相の営み。どんな誠実で懸命な人知・人意も直接関与できぬ多くの位相を宿す「無為」の世界＝人為を超えた造化力の世界≒自然活性力（z.B.〔医〕自然治癒力→医術の領野２0%)。とはいえ、抜枝も間伐もしない森は痩せ細りシュリンクする。医術ほどこさないと自然治癒力もうまく誘引されない。 ∴こその学術施策＝学術の森の自然活性力を誘引する仕事（文科省は森の番人） ∴学術施策にはトップとボトムの両側面、つまり国家や指導者の立場に立った観点も必要だし、研究者個々人の内発的活性力の次元の議論も不可欠。

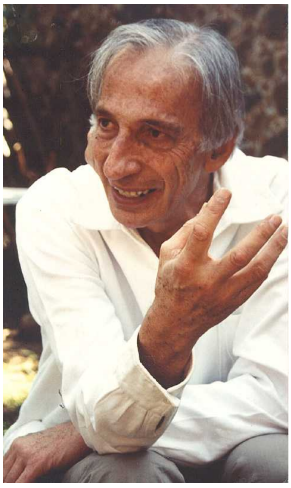
［※］ 人文の森の特性

芸術、文学、歴史、哲学、宗教、文化人類学等々、「教養の華」。学術の森全体では、土壌・地面のポジション。全研究者の内的活動を支える見えないマトリクス。研究者たちの、感性・思考枠組み・言語力・歴史観・生命観・倫理性などを培う。日は当たらぬ「地味な華」。GDP 比 0.5%。だが、本国の人文学：極めて活溌・溌剌活動（【４】参照）

****
【２】逆生産性に抗して
****

（１）逆生産性

学術施策も森の番人仕事、重要不可欠な営林の営み。
だが、「逆生産性」（イヴァン・イリイチ Ivan Illich, 1926-2002）に留意。


Ivan Illich

(a)　祈りのための通路や手段であった儀式や聖典が、精緻化され厳格化されればされるほど、祈りの実質がネグレクトされ、いつのまにかかえって、信仰の中身が空疎化する逆説。

手段（道具）は、「一定の強度を上回って成長するとき、不可避的に、その利点を享受しうる人々よりも多数の人々を、その手段が作られた目的から遠ざけてしまう」（Ｉ・イリッチ『生きる意味――「システム」「責任」「生命」への批判』、高島和哉訳、藤原書店、 2005年、163頁）

(b)　通信手段の発達（鉄道・電話・自動車・IT技術の発達）⇒
「つながり」の過密化⇒かえって「つながり」の希薄化⇒
人間的交わりの断絶と喪失を促進させる逆説

(c)　精緻で合理的な計画経済方式が、かえって生産の非効率化を産んだ旧共産主義体制

(d)　争いを諫め文化的で教養ある人間を育成し豊かな人生を叶えるはずの学校制度の整備充実が、かえって内発的学習意欲を削ぎ、差別や競争を煽り立てる成果中心の貧しい人生を産み出す悲劇⇒「学を絶たば憂い無からん」（『老子』二〇章）⇒脱学校（deschooling）論

（２）逆生産性のジレンマ

よりよくしようとする努力がかえって、人間的で自然で内発的な営みを抑制し、逆生産的な結果を生み出すジレンマ

☆善をなそうとする意志から、悪が生じる。 悪意によってもたらされる破局をはるかに超える大きな破局が、善意によってもたらされる逆説。この現代で怖れるべきことは、数々の悪意より、むしろ「全世界の平和、繁栄、進歩」といった善意で遂行される、善意の営為や組織体である。　⇒　学術行政につきまとう危険　⇒ツノをたわめて牛を殺す

☆誠実に熱心に善意を尽くし学術施策を検討し、あるべき施策を練り上げ実現する学術行政の営みが、かえって逆行的動勢を産みだすジレンマ。**懸命で情熱的にやればやるほど**、自由で内発的な歓びとしての学術研究を、かえって非生産的に抑圧してしまう逆説。

(3)　zB. ２１世紀の学術研究動向

とくに自然科学の領域において、「新発見」「新技術」に対して大きな社会的期待が寄せられるようになった。その結果、研究費用は巨額化し〔「科学技術振興費、科学技術全体……平成元年度比で約3倍」（「議事録」）〕、業績競争が加速度を増す。学術研究の中心軸が、かつての「知的好奇心駆動型」「苦悩解決型」から、「課題達成型」「業務遂行型」へ移行。内発的研究動機が、外発的研究動機へ変容した。研究それ自体の内在的価値に重きを置く姿勢から、研究に由って達成される外在的成果価値に、重きを置く体制に変質した。

(4)　必要からニーズへの変容

かつて、内的な「必要(necessity)」からだった学術が、外的な「ニーズ(needs)」に呼応する「学術産業」化。元来、人間は「必要」の圏域のなかで耐えて自足する技術をもっていた。学術もそのような技術だった。　だが、産業化の進展とともに「開発=進化」の思想が登場し、「人間の条件の核心であった『必要』は、人間の敵ないしは害悪に変わってしまった」(I・イリッチ、*Towerd A History of Needs*、1996、p133)。　こうして「ニーズ」が、人間社会蔓延。人間は、より多く、より速く「ニーズ」を満たすために、モノの生産と消費のスピード、効率性を競い出す。「ニーズ」が、世界各地共通の社会的規範として確立。

(5) 現代の貧困

こうした「発展=開発」の論理の裏には当然、市場経済の生産力増産計画や、経済成長を目指す政治的介入の意図が潜んでいる。「ニーズ」はトップダウン方式であるから、草の根的でボトムアップ的に発生する「必要」性を排除し、多種多様な人間の生命の活動を単純化・画一化する。近代的な個人の自由や自律や独創性を強調しながら、画一的なもの、右にならえの単一性が横行する。これをイリイチは「現代の貧困化」と呼ぶ。個人の内発的情熱や願望を信頼せず、そんなありさまで「イノヴェーション」を声高に叫んでもお説教、野蛮である。

☆「ほとんどの資金がプロジェクト的〔課題達成型〕になっているんです。そうすると，それがやっぱり視野の広くて非常に基礎的なところの部分に十分回らなくなってしまっていて，すぐ結果を求める形にならざるを得ないという状況にある」(金田章裕「議事録」第二回)

☆「短期的なプロジェクトは迷惑だと考える教員も少なくありません。そのプロジェクトゆえに，現場の私たちは翻弄されて会議は増え，挙げ句の果てにそれらのプロジェクトのために部局のポストまで奪われる。そして研究する時間がない，教育をする時間がない，人材を育てる時間がない，本末転倒なわけです。」(高橋淑子「議事録」第二回)

「国家プロジェクトの多くは、いわゆる〈無駄遣いだ〉と私は思っております。生命科学の現場では、大学の基盤経費、つまり運営交付金を増やしていただくだけで、おのずと萌芽的かつすばらしい研究がたくさん生まれる」(高橋淑子「議事録」第五回)

☆「昔のようにちゃんと基盤的経費があれば人文の方は十分……それで深い研究ができたんだと，なのに何でもかんでも競争的に取らなくちゃいけなくて，しかもそれが何となくイノベーションにつながらなきゃいけなかったり，それが圧力」(甲斐知恵子「議事録」第二回)

****

【３】慈雨の思想
／太陽経済の学術施策

****

(1)　「逆生産性」という社会的ジレンマをどうしたら乗り越えられるか。根本は慈雨。静かにひたすら降り濯ぐ雨。分け隔てなし。僅かでもいつもどこにもだれにも。give and give and give。take（見返り・成果）を求めない、ひたすらな贈与。メセナなる清らな慈雨≠「ばらまき」

2014.7.13 雨の恵み

(2)　研究者を全面的に信頼し、気前よく「任す」施策。「給付型奨学金」、「デュアルサポート」の見直しと強化、大歓迎⇒　自身の力で「生きる術」（イリイチ）恢復を期待。

⇒ジョルジュ・バタイユ（Georges Bataille, 1897-1962）の「普遍経済学」。

近代経済（呪われた部分〔非知性〕を排除した限定経済give and take）

未来経済（見返り求めぬ絶対贈与・太陽経済 give and give and ……）

「地球上のエネルギーの根源は、太陽から放射される熱。この熱は、補給や見返りなしに地球に与えられる。循環したり、回収されることがない、この熱の本質は《過剰なるもの》」　（G・バタイユ『呪われた部分――普遍経済学の試み』）

∴人民よ国家よ、太陽たれかし

G・Bataille

［※］　メセナ思想／太陽経済のトップモデル

zB. メディチ家のウフィツ。コジモ、ロレンツォのメセナ⇒全面信頼⇒

意気に感ず⇒ルネサンス文化開花。ダヴィンチ、ボッティチェリ、ガリレオもまた。

人文学は、木材にならぬヴァナキュラーな土台・美林支える見えない裾野。

∴人文学にとって、慈雨（運営交付金、私学助成金、科研費）は決定的。費用対効果抜群。

けっして「ばらまき」じゃない。メセナ。あまねく雨降らせないと、森は涸渇する。

それにしても**自然は凄い。海も大気も排除しらぬ。豪奢にあまねく受け容れ、贈与する。**

(3)「限られたお金を最も有効的に利用するためには，学術コミュニティーが責任をもってその任に当たる。そこが一番の我々の大きな覚悟であり，改革ポイントかもしれません。この点にメリハリをつけた科学政策が走り始めると，学術コミュニティーは一気に元気づくと思います。たとえ巨額の研究費でなくても，それが「正しく」配分されれば，研究者が一気に活気づき，確実に成果が出るはずです。しかも未来を開くようなすばらしい成果が期待されます。」「何より若者が自由な精神をもって大きなビジョンを持つことを最優先する，そういうことこそ，今の私たちに求められている時代のはずだ」（高橋淑子「議事録」第一回）

自由に羽ばたく環境。気宇壮大な意志や想像力や思索が湧き出る環境づくり。

⇒先行き不安を煽らない若手研究者の労働環境の整備⇒現状過酷。人文系非常勤問題

****

【４】人文の森マップ

****

(1) 考古学・文化人類学……世界の津々浦々。遺跡の発掘現場に必ず我が国の研究者。

勤勉実直な情熱、器用な職人芸的手先、そして科学補助金

(2) 臨床哲学……「カフェ・フィロ（café philosophique）」運動。全国３５箇所開設。

「臨床」＝クリニカル／ベッドサイド。生老病死の痛苦の現場。学校、ホスピス等に降りたって、痛苦の現場から新時代の哲学を構築

⇒大阪大学文学部臨床哲学研究室／鷲田清一

http://www.cafephilo.jp/

⑶ **仏典電子化**……日本は仏教研究のメッカ。zB.仏典電子文書化。
世界遺産の世界発信⇒「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」
http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html　日本仏教学会＋次世代人文学開発センター
人文情報学(Digital Humanities)の最先端研究事例。「日本の学術がオープンに国際的な場でもって評価されて」(安西祐一郎「議事録」第五回) いる好例⇒　EPUB化支援を是非

⑷ **東方美学研究会**……二〇有余年間。東アジアの芸能・芸道・美学について、日本側を基軸（広島大学・神戸大学・京都大学）に、韓国、中国他の研究者・院生たちとの、濃密な学術交流。国際会議、出版活動、人事交流活溌。留学生窓口。青木孝夫

⑸ **死生学**……生死の光と影をめぐる人文・社会学総合的研究。
⇒東京大学「死生学・応用倫理センター」。
21世紀COEに端を発しサナトロジーの世界的拠点
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/dalspe/index.html

⑹ **感性と論理の総合科学**⇒慶應義塾大学「感性と論理のグローバル研究センター」
http://www.carls.keio.ac.jp/gcarls/index.html　新学術領域経費。
心理学、哲学、芸術学、医学、情報科学等の総合的研究／渡辺茂、齋藤慶典

⑺ **野性の科学**……明治大学。野性の科学研究所　http://sauvage.jp/。
中澤新一、管啓次郎氏。自然と人間とのあいだを「野性」と名づけ、非知性の位相を探ることで、自然科学･経済科学･社会科学等を包摂する大きな原理を探求。

［※］　ブリリアントな上記の美林プロジェクトばかりでなく、人文学は「教養」という名で、学術の森の裾野や国土の地味な地盤を形成している。「底上げ的なレベルでの教養」(亀山郁夫「議事録」第二回) としての人文学は重要。「明日，明後日，来年にはすぐには製品化にはつながらず，利益もでず産業とは直結しないけれど，やはり「知の根本」を支えるために，国民の税金を使わなければいけない」(高橋淑子爆弾発言「議事録」第二回)。それが「民意」だろう。一般書店の本棚の賑わい。歴史書、思想書、文学書、語学書、美術書等々、日本の教養文化という裾野を形成し育成している如実な証左。「国力の源泉」そのものではないか。